

雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	8 2
ページ	9 0 - 1 1 0
発行年	1900-10-30
その他の言語のタイトル	雑報
URL	http://hdl.handle.net/2298/5045

雜 報

○皇太子殿下の

奉迎と奉送と

畏くも 東宮殿下は、十月十四日青山御所を御發輦し玉ひ、湘南の風光、鴨涯の晴嵐、舞子の清波をめてさせられ、それより海路、かの西人の激賞して「世界の絶勝」と呼びし内海の壯觀にあかせられ、二十日關門の鎖鑰を觀せられ、翌廿一日鶴駕杳城に入らせ玉ひぬ。此日雨天なりしも、滿城の老幼子來して雲霞の如く、旭旗軒端に翻りて、瑞氣秋天に滿ちぬ。文武の高等官を始めとして、當地の各學校生徒沿道に整列し、最も奉迎の意を致しき。午後三時三十分憲兵警部長の先驅にて、玉顏殊に麗はしく、鹵簿肅々、一帶にしき渡せる白砂の上を過させられ、御旅館偕行社に入らせ玉ひぬ。

謹んで惟みるに 天孫九國の地に降臨ましまし

王化最も早く此土の民に及びしと雖、神武東遷以降、九州は邊陲僻遠の地となり、非常の大事あるにあらざれば、天子皇族の來臨を辱うする能はざりき。熊襲剿討の宏謨は 仲哀天皇の御親征となり、鷄林懾伏の大計は神后の出馬を促かし、西陲の微臣武光のあるありて、誠忠能く懷良親王を此土に擁護せしも、此等は國家多事の際にして、臣民の龍顏に咫尺せんと到度能はざる所なりき。さるに、今や畏くも 東宮殿下の御巡啓を辱うし、千古未曾有の事に遇ふ。蒸々たる生民、誰か狂喜歡奮 殿下の御高德を仰慕せざらんや。臣等感激胸に塞りて、其言ふ所を知らざるなり。

二十二日渡鹿練兵場分列式に臨ませられ、幼年校師團司令部赤十字社支部に御立寄りありて、午後二時成趣園に枉駕し玉ひ、騎射擊劍等を御覽遊はされぬ。

殿下の御逗留一日も長からん事は、在熊五萬の臣民か切望してやまさる所なるも、如何せん、

御巡啓の日割既に定まり、且邊僻の地景勝珍奇に乏しきを。二十三日午前九時二十分 殿下は、蟻集せる奉送の人々をのこして春日停車場を發し玉ひぬ。此日快晴、洗ふか如き秋天一點の雲をどめず、蘇山の烟遠く中天に浮動し、花岡山腹の霜葉錦繡の色を呈して、また 殿下の行途を奉送するに似たりき。生等 誠恐謹みて殿下の行途愈恙無きを祈り奉る。

○御覽に奉供せしもの

左記目錄の品類は 皇太子殿下の御覽に本校より奉供せしに、御満足に思召さるゝ旨御沙汰相成、且つ琉球風俗繪卷を除く外悉く御持歸相成ぬ。

太閤征韓の際名護屋城に於ける諸候陣立の圖

壹 折

同上記錄

壹 冊

切支再一揆

壹 冊

肥前國原古城趾に於て採拾したる彈丸

貳 個

沖繩風俗取調書

壹 冊

沖繩風俗繪画

壹 卷

以上武藤教授校命により實地に就き取調たるもの

阿蘇山噴火口近時變動説明書

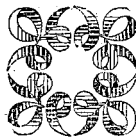
壹 冊

阿蘇山噴火口及附近の寫眞

貳十五葉

以上友田教授校命により實地に就て取調及撮景したるもの

兩教授の榮また大なりと云ふべし。



第十回開校紀念式概況

蘇山高く聳ね、白川長く流る高きもの其礎へや堅く、長きもの其源や遠し以て萬古其威靈を改めず、以て千歲其流を絶たず、炎々たる活火は天を焚き、滔々たる奔流萬項の田を潤うす、其活動其効績誠に偉且大なりとひふべし。我校此山水の間に創立せられて、以來年を重ねる僅に十歳星霜又久しからず、而も校規日に張り、文運月に隆に、内には粹を地方の中學に抜き、才を有爲の士に養ふ。外には既に卒業の榮を擔ひしもの八百余名、概ね大學に入り、各種専門の學を修め、公私百般の業務に服し、以て國家の盛運に資し、社會の進歩に貢獻し、又將に本學年を以て新設工學専門部の第一回卒業生をも出すあらんとす。去るもの汪々として雲の如く、來るもの滔として潮の如し。學術の宿驛、顯達の關門、出入去來、人をして殆ど應接に遑あらざらしむ。誠に九州の學舎として、國家が莫大の費を抛ちて、本校を設けたる旨趣に叶ふと云ふべし

豈に盛ならずとせんや。現在にして然り、猶將來の盛運に到りては、勤めて陋を去りて美につき、弊を矯めて善に移り、社會進歩の機運を察し、敢て時勢に遅れを取らざりせば善く雄を蘇山と争ひ、鎬を白川と削り、其名年と共に宇内に高く且長く九州の鎮と成り關西學術の覇權を握らんこと、吾人の呶々を要せざる所なり。是れ實に曩に其職に當りしもの、鞠躬盡力、苦心經營の致す所と云ふべし。吾人現に教を此の校に受け、其餘澤に浴ふもの何ぞ夫れ今日を祝せずして可ならんや。今日を祝すると共に、何ぞ俯仰往日創立の當時を憶び、敢て其苦心の跡を失墜せざるべきを誓はざるべけんや。宜なり、茲に第十回創立紀念會を舉ぐるに到りしこと、而も天公何の意ぞ吾人が觀呼の中に迎へ、跳躍の中に送らんと、望ちて待ちし當日の前日來沛雨盆を覆すが如く、天空濛々として一時の斷間なく、「噫當日の天氣果して如何？」とは萬人の愁眉に讀まれね。實に是一人の患にあらずして、萬人

の患なりき。而かも猶未だ命運盡きざりしか、其前夕に至りて漸く翌日の晴天を散點せる星に、豫報しぬ。吾人の喜悅知るべきのみ、

十月十日例に依り、式は雨天体操場に開かれたり。前日來の雨に引きかへ、天氣晴朗一天の雲翳なし。午前八時五十分嚟曉たる集合喇叭の聲と諸共に生徒一全著席、亞で職員及來賓一全著席せり。式の正面には、紀念の大額を掲ぐ。額面は粟粒を糊布し、色黒々と紀念の二字を浮かせり。左に旭日の大旗漂々として聖代の稜威を表し、右には某氏の達筆を振はれたる「郁々桂蘭在彼芳叢、豈不夙夜進思盡忠」の大掛物あり。美氈、壇を覆ふ所、勇士の面影其儘の甲冑あり。秋芳亂發、絳葩簇叢、異香人を襲ふの花瓶あり。世界を一眼の下に見る渾圓地球儀あり。右には和洋の書數十冊堆をなし、其次に幾千代操變らぬ松竹梅を飾る。頭上には黃白赤青數百の、小旗を七重八重に翻へし、或は國旗、或は秋の千草、或はカリケチュア、或はアレゴリ

或は詩歌俳句等を寫し、粧飾頗る美なり。今式の順序を云はんか、櫻井校長先づ立ちて、勅語を捧讀せられ、次に全校長の祝詞あり、職員總代武藤教授工學部四年總代池神君、工學部三年總代西門君、大學豫科三年一部三年總代柳井君、二部三年總代倉塚君、全三部三年總代諫山君工學部二年總代糸山君、大學豫科一部二年總代片上君、二部二年總代山邊君三部二年總代藤波君工學部一年總代白木君大學豫科一部一年總代藤崎君二部一年總代渡邊君三部一年總代田上君。は各祝詞を朗讀し、次に在仙臺中川前校長の祝電、在京都法科醫科理工科大學生の祝電披露あり、次て柳川氏成田堀三氏の祝歌の高吟あり。次に生徒一同(阿蘇の峰より云々)の祝歌齊唱。茲に式全く終る。時に午前十時尙來賓の重なる氏名を擧ぐれば、原陸軍砲兵大佐、栗屋陸軍獸醫監、內軍騎兵少佐、津田陸軍二等軍醫正松本陸軍監獄長、田中本縣書記官本校區域中學校長會出席のため來熊中の各縣中學校長兩新聞記

者其他紳士紳商六十名許りなりき。式の終ると共に擊劍試合は始まり、曩の森嚴犯すべからざりし式場は忽然雲起り雷至り風生じ雨來るの活劇場と變じ去りぬ況や本日は主に新部員と舊部員との粹を集め華を振きたるものゝ組合なれば觀客蝟集し、眼を凝し、瞳をやり片睡を飲んで下瞰視し戰士の勇氣も亦平日に倍從し、舊士は以て龍南健兒の榮譽を双肩に荷ひ、昂々たる氣慨既に人を吞む。若黨の士は今日初陣の戰に多年の手練を試し、秀群の功を樹てゝ古參の膽を寒からしめん、何條未練の振舞して無念の赤愧かゝんやと、何れ劣らず互に秘術を盡して立ち向ふ。されば貴顯紳士環塔の中に少しも憶せず、少しも操かず、虚を察して進み、實を察して退き、法に従ひ術を奉じつ疾風飛電一嘯一閃打込む氷刀空を切て敵の眉間を割る處、實に壯絶快絶勇絶。忽にして聲々相和し、忽にして憂々相撃つ、忽にして肅々水を打ちたる如く、忽にして喝采四方に湧く。一組終りて又一組愈佳境の中

に十數番の取組み終を告げたりしは、漸く十一時なりける。

右終りて運動會を行ふ非常の盛會午后六時全く開散す。其勝利者は左の如し。

第一回 旗拾

1 到海 2 守田猪 3 山崎 4 富近

第二回 全上

1 高橋通 2 古賀清 3 南條 4 野上喜

第三回 戴袋

1 大西 2 杉田 3 林田

第四回 全上

1 林 2 二階堂 3 村上

第五回 全上

1 稻川 2 伊賀

第六回 野仕合

紅軍勝利

第七回 二百二十碼

1 大西 2 佐藤始 3 國武 4 小川

第八回 全上

1 高橋通 2 大野 3 諫山 4 川井田

第九回 全上

1 古賀清 2 工藤 3 中山 4 宮本

第十回 障害物

1 石川藤 2 村上伸 3 柴山 4 竹永

5 南條	5 1 袋	5 1 池内	5 1 不破	5 1 松本	5 1 黒髪小學二人	5 1 黒髪小學五人	5 1 附屬三人	5 1 清水	5 1 村上爲	5 1 吉田、是松	5 1 赤勝利	5 1 白勝利	5 1 矢野
第十一回 全上	第十二回 全上	第十三回 小學生徒々競争	第十四回 全上	第十五回 全上	第十六回 盲目	第十七回 全上	第十八回 二人三脚	第十九回 フットボール	第二十回 母衣曳	第二十一回 俵送	第二十二回 提灯競争		
増原 4 吉國	森田 4 西岡	北郡小學五人	附屬一人	西部一人 北部一人	守田	關	小山、續		竹永		澤		發田

1 森田	1 徳永	1 吉川	1 師範大庭	1 師範大崎、前山	1 師範高田	1 師範大賀、吉田	1 南	1 諫山	1 武藤	1 中村	1 外間	1 石河	1 山本	1 稻川
第二十三回 全上第	第二十四回 全上	第二十五回 全上	第二十六回 全上	第二十七回 全上	第二十八回 全上(商、工、農、數學校)	第二十九回 四百四十碼	第三十回 職員(戴袋)	第三十一回 全上	第三十二回 擬馬	第三十三回 八百八十碼	第三十四回 委員競争			
山下 3 齋木野 4 岩下	萩野 3 徳永 4 田所	上床 3 黒岩 4 鶴見	幼年肥後 3 幼年佐野	全上古賀 3 幼年黒木	全上 8 全 4 數	古賀 4 黒川	島野 4 神谷		竹田、小野、菰田	古賀 4 大野	副島			

第三十五回 各組撰手徒競争

チヤンピオン

誠山久孝(文科)二年

○在寮法科生懇話會

十月十九日午後七時半より例の如く瑞邦館にて開會す、會するもの五十余人、非常の盛會なりき。此日の討論題次の如し

國民全盟會外交政策の可否

片山委員の開會の辭、發題者高橋君の説明を終りて討論に移りぬ、此日抽籤により柴原君議長となる。

積極の側に立ち國民全盟會を賛助したる論者は、詭辨を以て名ある高橋君、愛嬌ある野守君、莊重なる杉生君、眞面目なる白石君、堅實なる花田君、論理を以て「ゴマ」かさんどせし藤堂君、(即ち)を連發せし別府君等にして、消極論者として大に支那保全論を攻撃せしは、多々辨して遂に本題に入らざりし佐藤君、湯を飲むと三斗瓢の如くなる村上君、手を振る野村君、支那

九十六

人的模糊を以て瞞着せんとせし河野君、アウストリヤとアウスタラリヤを間違へたる柳川君、其聲明かに其論矯なる谷口君穩當なる大場君等なりき議論空湧甲論乙駁、時の移るを覺へざりき、討論終りて茶話會に移り、各々例の苛酷なる拳に練はれて午後十一時散會。

討論會

昨年鐵道國有の可否に關し討論會を開き、非常の盛況を極めた事は、諸君の既に知らるゝ所であるが、今回又一現時日本に於て死刑を廢する可否」と云ふ題で討論會が開かれた。今之の概況を評して見よう。

高橋君。は嘗て國家社會主義を以て前討論會に氣焰を吐いた男である。氏は五つの理由によりて死刑廢止を主張したが、其の重なる點は刑を行ふ目的は變化否進化するものである、依てソロモン主義即ち人を殺せばそれも亦殺さねばならぬと云ふ様な古代の主義は現今文明の産

會には行ふべきものでない、又罪人を出すは社會の罪惡である、社會の改良は計らないで、刑罰たけ加へたとて、果して人類たる責任を盡したと思ふか。と云ふ様な点であつた。君はその根據とする處を五つに分ちながら、自から第三のは述べずに取消した、言ふ程の事でないなら寧ろ始めより四つに分つと云方がよろしい。ツマリ、これは同氏が準備の足らない點で、大に其の根據とする處を自から弱めたものである。言中往々久留米なまりが出たが、これは余り譽めた事ではないと思ふ、要するに前回に比して不出來であつた云ふに躊躇しない。

村上君。宛も仁王の聲の如く、益大の眼を以て反對論者をネメ付けて曰く、殺人者に死刑を宣告するのは、正當の報酬である、殊にかゝる奴等を生かして置くのは國家の安寧を保つ所以でない、これ迄は先づ聞けたが、終りに人口増殖する此の時勢に罪あるものはドシ、殺すべしと云はれたのにはヒヤリとした、スサマジョー

御勢で、多分賄御受持の御經驗から出たのであらう、調子ハツレの聲と、我田引水的の議論とは、感服の出来ない處であつた。

藤堂君。刑法のレクチュアをする様に説て曰く、日本の刑法は拆衷主義である、即ち死刑を存するは、正義であつて且つ必要である、と云ふのである。而し死の苦痛は死なねば分らない、ツマリ無限大であるから、これを課するは至當でない、又殺人者を社會と隔離する必要があるとすればこれには無期徒刑を課してよいのである。と而しまだ辨し終らない内に時間が來たので、尻切れで壇を下つた。氏の演説は飽迄も説明的で音聲に變化が少いのが缺點である。次は自から吞牛と稱する肥滿を以て名高き

駕海君。である、氏は台灣土蕃が死を見る事屁の如きを説き、野蠻なるものには嚴刑を加へねば感じないと云ふのが主な論點であつた。即ち氏は現時の日本を以て台灣土蕃を距る遠からずとせられた様であつたがその間の差がどれ位で

あるかど云ふのは言明しなかつた。之は氏が文科生で數學を忘れて居るからであらう。呵々氏は台灣時代と云ふ新熟語を作られた、これは野蠻時代と云ふ意味だそうである。未來の大辭典に洩れてはならないものである。而し處女演説としてはマアよかつた。

水口君、氏は死刑に階級なし、十人を殺すも一人を殺すも歸する所只死刑と云ふ一で、不都合極まると論じ、統計の示す處によれば死刑に處せられたるものゝ百分中七十は色情に基くが故に、此の原因を除けば善人たらざるを保せずと云ひ、若し殺人者が罪惡を再びするより、死刑を廢すべからずと云ふならば、社會に害あるものは凡そ殺さざる可からずと論せられた。言語明晰で、態度も可なりによろしく、先づ上々出來であつた。余は可成その疎髯を愛撫せられん事を望むものである。

外間君、余は(判官の判決は決して誤りなし)と氏が反對者の誤判云々に向て放たれた誤明言

の外、氏の辨説を記する事能はざりし程、余の耳の聾なるを悲むものである。

司城君、氏は外間君を駁して、法官の誤判なきにあらずと辨じ、反對論者は死罪を無期徒刑に變せば牢獄より遁るゝものあると云ふに對し、牢舎を堅にせばよろしい、と論せられたが、言はずもかなと思はるゝ様な枝葉の事であると思ふ、流暢でなかつたのは、余り感服が出来なかつた。

萩原君、開口第一先づ叫んで曰く司法官の誤謬を以て法の不備に歸すべからずと、終りに、若し死刑を廢すとせば、賣國奴も又は國家の元首を弑せるものも共に苦痛少き刑罰に處せざる可からず、かゝる事は余輩の忍び得る處にあらずと、極限の場合ではあるが、余程これを打破するに困難であつたと見え、たしか積極論者は一言のこれを駁するものなかつた様であつた。言少々他に互るが、伊太利第一流の刑法學者某氏は、フンペルド王が無政府黨から暗殺せられた

後、俄然持説を一變して死刑保存論者となつた。と云ふのを、朝日新聞で見したが、如何に此の極端の一例が人を動かすかは分るのである。萩原君は舌の回轉が尤も速かなる一人ある。スカサナイ處余程感心だ。而し言語明晰を欠くのが惜い處である。

三塚君。萩原君に答へて、曖昧なる法あるが故に法官をして誤判あらしむるのであると云ひ、奇言を以て「目を以て目に酬ゆる」と云ふ消極論者の説を駁して曰く、死を以て心ず殺人者に酬いざる可からずせば、強姦に酬ゆるに強姦を以てせざる可からずと言つた、氏は終始眼を原稿に注いて態度かイケなかつたが、處女演説としては不出來と云ふ程にもなかつた。次は鼻目秀麗なる歌人、

柳川君である、氏演壇に立つや、「ヨカズ」と叫ぶもあり、以て其の風采の如何に揚りしやを見るに足るのである。曰く、社會は正當の防衛として刑罰權を有す、故に殺人者は又社會正當防

禦の爲めにこれを死刑に處せざる可からず、然らずんば社會の平和得て期すべからず、又余輩は殺人者の如き人非人の者を社會に生存せしむる必要を認めずと、態度沈重、抑揚ある音聲若し勉て止まずんば、人心を動かす点に於て成功するであらうが、攻撃演説として未だしと云はねはならぬ。而し大出來と云ふを憚らない。河野君。曰く、死刑に處せば犯人をして永久に改悛せしむる能はず、これ不條理なりと、氏も亦誤刑云々を繰り返した、聲音高調に失したのが、不満足の点である。次に顯れたるは、年少白哲の醫學生

岸川君である。氏は河野氏が誤刑云々を駁して曰く、誤刑あるが故に死刑を廢すべしと云ふは、猶ほ瀛軍に脱線あるが故に乘るべからずと云ふに等しと、椰榆一番し且つ曰く、我等が死刑保存を主張するは、正義に交ふるに實益を以てしたもので、詳言すれば道德の範圍内にて人を罰するのである。云々、又曰く無限大の罪を犯した

る者には無限大の罰を課するが當然である、
 積極論者中より「誤解せり」と呼ぶものがある、
 太郎氏眼を丸くして人を悉く誤解せりとす
 るは亦自からを誤解せるものであると云つた、
 態度頗るよろしく、音聲も落ち付いて居つて、
 先づ申分はない。氏は頻りに積極論をシャク極
 論と云ふ、大方これはラチン流の發音だろうと
 は下馬評。一体に余り反對論者を鼻であしらつ
 たのがイケない。次は豊前の國の住人、正憲
 勝君である……これは平山氏の言を假る……
 説明的に説明した。而しこれ迄の論者が云つた
 のと大同小異であつた。只新しく聞けたのは、
 人の殺人を爲す一時は、精神高潮に達して居
 つて殆ど萬事の判斷力を欠くものである……君
 は人を殺したかと呼ぶものあり……で、其の瞬時
 を過ぎた後、判斷力復舊し、悔悟の念生するもの
 である。それ死刑に處するのは、ツマリ殺人前
 一瞬間に、人がどんなに馬鹿になつて居るかを
 知らない者である。この言であつた。聲が高調子

で變化がなく、余り説明的であつたのは、欠点だ。
 杉生君。は、街頭狂犬あらば、人これを撲殺す
 るが當然である。何を苦んで反對論者は人間中
 の狂犬を生して置くのであるかと云つた。聲音
 頗る奇軍談を聞く心地がした。
 林田君。氏は社會が殺人者を刑する權利のみを
 知り、殺人者を教導する義務を知らないのは、所
 謂職權亂用である。と叫び、反對論者の言論を以
 て瘠犬の吠ゆる様だとカラカツた。氏の演説は
 大分進歩の跡が見える、聲が高調でない様に
 なつたのも改良の一であらう。而し始むる時天
 井を見廻す様なのは、ワザトラシくつて余り譽
 めた事でない。
 平山君。氏が高橋氏を駁したのは、存外面白かつ
 た、曰く、高橋君は高等學校で大學の卒業論文を
 書こうとして居る。これ實に境遇を知らないも
 のだ、何故なれば氏は刑法が進歩主義であるこ
 繰り返へした、が而し日本の現勢は此の進歩主
 義を行ふ迄に社會が進歩して居るのであるか、

これ實に高等學校で、大學の卒業論文を書こうとして居ると云ふ譯である。と翻弄し得て頗る妙であつた。殊に氏は頗る眞面目で、積極論者の爲めには勁敵であつた様に見受けられた。而し方言を交へて、ソノくど重用し、聲重からず、人心を動かす演説振ではない。態度も少々改良して貰いたい。次に、

高橋君又演壇に上る、消極論者囂々として、その不理を鳴した。部長辨して曰く、討論會に於て、初に意見を述べ、反對黨の反駁を受けて、これに對し又々反駁せんと欲するも出来ないのは遺憾の時もある。で今回その感を少なからしめん爲め高橋君をして始めの討論に時間を余さしめ、その余りの時間を後に又用ふる事にせしめたのである。と、高橋君が此の演説は殆ど蛇足に過ぎなかつた。即ち述ふる處、罪人を活して軍事に用ふべし、曰く一年に我國死刑に處するは百人内外である、一人八拾圓とするも八千圓である、これ位の金はどうでもなる。等

、殆ど人をして呆然たらしむる名論であつた。氏も平山氏と全しく、ソノと云ふ辭を重用した、ソノ中ノソノと云ふ様な風で、頗る聞き悪くい

次は積極派の主論者、

秋山教授である、教授の廢止すべしと云はるゝ點は三つである。第一刑は犯罪行爲の程度に應ぜず、其の原因を極むべき必要がある、即ち交換主義ではいけない。第二、斷頭臺に上るを見れば誰れしも惻隱の心を起す筈である、これ其の苦痛を察するからである。かゝる痛苦の事を社會より排斥するのは社會の責任である。第三、良心に判じて不得殺人を行ふものがある、これは事情誠に死刑に處するに忍びない。と以上が先生の所謂要點である。始め先生が演臺に上らるゝ際「暴論を吐かざるを要す」君も亦レブイトする一人か」どの聲起つた、存外レブイトの點もあつた、が兎角一度苦んで學んで御坐るから、刑のコンセプション文だけは謹聽した處であつた。次が消極派の主論者、

二宮講師。である、先生は日本現時の状況と、國体上より保存説を取ると述べられ、曰く、一國の主權を毀つものあらば如何、國家の生存に危害を加ふる者あらば如何、人一腕を斬らずんば生存せずとの醫師の診斷を聞かばその一腕を斷つは通常の事である。若し死刑が苦痛なるが故に廢すべしと云ふは、尙ほ右の場合に一腕を斬らないのと同じく國家の迷惑も計り得られぬ次第である、反對者は死刑に程度なしと云ふが、そうかも知れない。而し國家が非常に危害を受ける程度大なる故に、それに應じて適當なる最大刑を用ゆるものにて敢て程度なしと云ふ事が出来ない。殊に現今日本の状態は未だ進化論者の説に従て、これを廢するを得ない、又、我國体尊嚴大に外邦に異なるが故に直に外國に従てこれを廢するが出来ない。と云ふ様の概旨であつた。國体主義を持ち出されたのは余り感心はしなかつたが、莊重で演説は先上出來である、秋山教授の様に舌の廻らない代りに、又全教

授の様に平板の演説でない、兎角マゲの先生には驚くべしである」とは傍聴者のさうやきを僕が寫したのだ。

時に十時三十分、討論終結の宣告あつて、部長は審判官諸氏に投票を乞はれた。審判官諸氏は、渡邊、青木、兒島、奥、長谷川、山田の諸教授及上田講師の七人で、投票の結果、

廢止を可とするもの四名
廢止を否とするもの三名

乃ち勝は積極論者に歸した、當夜は會長の來臨もありて非常の盛會であつた。而し討論に眞面目を欠ぎしは余の遺憾とする處である。惡口の多いのを以て進歩したりとなすは、甚だ喜ぶべき事でない。望蜀の念に堪へないから、以上の出鱈目も附記したのである。妄評多罪。

○習學寮細則の變更

從來特別の許可を得しものにあらざれば、點檢時間後は歸寮し能はざるりし處、今後は點檢後と雖、十一時迄は事由を具して門番を經、宿直

の許可を得ば歸寮し得ることゝなれり。思ふに、此改正は已むを得ずして外泊するものを、成る可く減少せしむるの方針より出てたるものにして、當を得たるものと云はざる可からず。願くば、全寮の諸兄、意のある處を了して、門外漢の謗を買ふ如きことあるなかれ。

○休息室の設置

學寮の擴張につれて、閱覽室は變して休息室となりぬ。從來のものを移轉して、一層設備を加へ、且寄贈にかゝる新聞雜誌の外に、各寮生より少許の金員を徵集し、新たに新聞雜誌を購入することゝなれり、學寮の爲喜ぶべし。

休息室とは何ぞや、偃臥欠伸半日の勞をやる所にあらざるべし、鼾聲雷の如く宰予の二の舞を演ずる所にあらざるべし。思ふに、學業の余暇を利用し、相集り相談し、其智識の交換と共に一般寮生の團欒和睦を助けんが爲めのみ。吾人は此意味に於て、休息室なる名稱を賛せざるなり、休息の名の下には安逸懶惰を聯想するにあらずや

、寧ろ之を懇話室と呼んが、將た、舊稱閱覽室の名を存するの却て適當なるなきや否や。

○金峰山の夜色

青州一たび學校長の戒しむる所となりてより、炎々たる青年の抱懷、何れの處にか伸ひんとする。近時我校の士三五相携へて金峰山頭の夜色を探るもの多し、壯行誠に欣すべし。夫れ青年は活動の化身なり、時に過激に失し奇矯に流るも、之れ余勢滔々禁すべからざればなり。人或は此行を無謀と笑はん、人或は此行を身体に害ありと誹らん、されど終日書籍の奴隸となり顔面蒼白、一見人をして活氣あるかを疑はしむるに孰れぞ、寮則の違犯者となり深夜人目を忍びて丁々碁面に對するものに孰れぞ、海面を抜ぐと二千尺、仰けば星斗爛干として萬天の珠をつらね、恍茫として清都紫微の遠からざるを感せしめ、俯せば萬籟正にやみて、寂靜の氣四境に満ち、清寒骨に徹して人生の括括を忘れしむるの快、到底塵巷書齋の裡に永むべからざるなり、

吾人は益々此種の壯行か盛んならんことを望む

English speaking club

豫ねて風聞ありし同俱樂部は愈々設立の事となり、本月下旬より開會に着手せり。聞く所によれば、同部はブラクチス、及びトランスレーションの二部に別れ前者は、火曜、後者は水曜、各々午後六時半より、七時半まで殆ど一時間を限りて、イングヅツシユ活用の手段を攷究しつつあり。而してこれが主任となれるは兩木村、遠山、奥諸先生なりといふ。

○工學部 ポートレース

本月中旬工學部ポートレースは、例の如く繪津湖に於て行はれ、非常の盛大を極めたりといふ

○法科大學生某君に答ふ

法科大學生某てふ名義にて左の書信に接しぬ、編輯御盡力御苦勞之程察入候然るに卒業人名中誤字多きに驚く

法科

野村綱眞(貞)

福原清次(吉)

文科

戸河原吉(平川) 落合悌三郎(貞)

岩佐藤孫(湯淺) 川緣正幸(淵)

犬丸定吉(貞) 白仁三郎(脱)

二部

大谷重次(治) 重松能伸(信)

市來將二(尙) 堀部治郎(次)

三部

榎本尙次(二)

卒業生を侮辱して遺憾なき者新編輯部員就任勿々大成功と云はざる可からず其他校正の疎漏言語に絶するものあり少しく留意する所ありて可なり以上(圈點は來信の儘)

十月廿日土曜閑散の夜

厚意多謝茲に記して正誤に代ふ併せて一言御返答申上候。

校正の粗漏は我々實に申譯も無之次第、さう乍ら「言語に絶する」迄甚しきや否や靜かに御再讀奉願候、又卒業生中白仁三郎君を脱せしは實に

全氏に對し謝するに辭なき次第改めて御託申上候、序に問ふ某君よ「卒業生を侮辱して遺憾なきもの新編輯部員就任匆匆大成功」の言は果して君が眞面目に吐きし者なるか、吾人は此の如き常識以外の語か何を意味するかを解する能はず、君は龍南會委員は毎年三月に改撰して四月に就任するを知り玉ふか、就任匆匆の言は如何なる意義を有するかを解し玉ふか、文字を使用するに當りては今後少しく留意ありて可なるべく候。さて又校正の疎漏を以て直に侮辱を極めたるものとなす理論は現今何れの國に行はれつゝありや、君は法科生なりと云ふ君はアフリカ法にても研究中にや、加之之れを以て編輯員の成功而も大成功と迄解する君は少々狂氣にはあらざるかど一同心配致居候、我等は君の厚意を謝するごともに又君か之れか爲めに（ノートブック）を訂正する時間を失して萬一の不幸に逢遇せらるゝなきやを杞憂致居候拜復

○口頭放語

白眼生 投

先日の討論會は、中々の盛會であつた。法科生諸子の駄法螺には、殆ど驚かざるを得ない。辨士の短評をして見れば、マツポシが萩原君の慣用語で、大聲罵言が村上君の通弊で、演臺たゝきが三塚君の態度で、白眼冷刻が勝君の失策で、頻りに戰慄したのが杉生君であつた。但し此れは、所謂武者ぶるゐるとかいふものであらう。確か柳川君かどれもつたよ。口調と態度とは當夜の白眉であつたが、いやに氣取つて居たのは、癪にさわつた。岸川君は猥りに反對黨を愚弄する計りで、いはゞ一場の滑稽をやつたのに異ならない。討論乃至演説としては、尤も價值のないものと思ふよ。

尤も眞面目に、尤も正實に、尤も着實に、尤も熱誠に富んでいたのは、平山君のであつた。秋山教授のも、二宮講師のも、あまり謹聽の價值は無かつたのである。

前號雜報中、赤門便よりは中々面白かつた。活氣の多いのと、意氣地の強よかつたのとは、尤

も讀者の「少くとも予一人の」歓迎を得たのである。予は雜誌部員が斯の如き投書を俟つに、十分の自由主義を採用せんことを望むものである。

序に前號に就ゐて、單簡の批評をして見よう。兎島教授の「文學上楊雄の眞價值」は題からして、大氣取に氣取られて居た。内容は餘程細緻な討究を試られたもので、文辭の上でも才氣喚發の形跡は鬱勃として居るやうだが、何だか文章は一種の僻があるやうに見うけられた。「見よ……試に見よ……」彼は……なりしなり……否むしる……なりしにあらざる」の如き無闇に空叫びする風習があると思ふ。中隈君の「本邦工業振興策」は、もすこし長く書いてはしかつた。あれでは目次を列べただけで、何の妙もあつたものでない。太田君の病理地理概論」は何だか大層ならさうな題目ではあるが、所謂御藥の廣告的で内容はつまり汰目にすぎない。友田教授の「寫眞の話」は、やゝ時候後れで、十日の菊で

はあつたが、一番趣味が多かつた。「エー詩を天
上界から引きおろして……」の一節は文學者
的口調に耻ぢなかつたのである。いはゞ教授の
文は、教授其の人の如しで、一から十まで滑稽的
であつた。金城君の「理想國」、之はユートピアの
譯文で中々の見ものであつた。外國語に達した
者で無ければ、容易に出來ない事業である。布峰
君の「江山放浪」吾雨君の「パースの小詩」共に
多趣の文字である。文學者の閑文字として、一笑
に附し去るは罰あたりであらう。芝峰君の「美文」
はヤタラに氣取つて、歐文の趣味を加味し、わけ
もわからぬ蟹語を亂用した計りで、何の價值も、
あつたものでない。あれでは流石の紫川君も、閉
口したのであらう。藤輪君の「名殘の雪」クリス
チャン臭くつて、鼻もちがたまつたものでない
「譽は、高き豫言者の、十字の旗を推したてゝアラ
……イヤダよ、あの御方は、十字の旗なんて、あん
まり勿体ないんですもの。ほんとに、致方がありや
しません。あんな言計り、仰つて……しづね」

梨雨君の「綠陰微吟」駄作もあつたやうだが、中々面白いのもあつたやうだ。和歌は相異らず盛大を極めて居る。三四つ計り見榮のある作も、見受けられた。兎に角、短歌は盛大の位置に向うたといつてよろしからう。野々口先生の漢詩は雄壯で雄渾で、壯大で頗る光彩があつた。「八代郡」はむしろ先生の得意とする所でなく、却て後塞上曲の如き沈鬱な古詩が、先生の伎倆を表したものである。柳浦君の作も中々面白い、流暢が作者の手のものであらう。但し活字の誤りも二つ三つあつたやうだ。惜しい事である。

次に俳句六首、作者は、つばり湖海先生と思ふ。先生の多能には驚くべしである。

紀念會の祝詞はいづれも、形式的計りのものに過ぎなかつた。やれ白川の水がどうしたの、龍田峯がこうしたのと、御きまりの文句を引用したのは、實に抱腹絶倒の至りであつた。龍田の白川のと大事さうに騒ぎたつるより、むしろ藤波君の祝詞が尤も單簡で、時にとつて一興で

あつた。つまりは機先を制するのが肝要の手段といふ事になつてくる。

○赤門たより

秋老いぬ、山に紅葉あり、園に菊あり、塵の巷にあつて龍南田園の美を憶い、從て通信が重に龍南に關するは不得止儀にて、不惡諒察願上候。皇太子殿下、御西遊被遊候儀、我西方の父老は定めて難有涙に咽び候事と存上候。此の千載一遇の時に於て、龍南に御臨校被遊ざりし由拜承仕り、如何にも残り惜しく存上候、これ殿下御治定の期日に余時なかりしにより候儀と存上候得共、亦龍南校舍にとりて千載の遺憾に存上候。

雜誌八十一號昨日拜受、友田先生の寫眞の話、宛も其の人に接する思有之候。同氏が物理學を以て云ふ可からざる興味ありとし、嬌乎とし、深遠の理を講じ、「さもあるべき事です」と偶語する時は、人生天職を盡するの如何に快事なるやを思はしめ候、矧川が十二年地理學に盡す云

々あゝは日を同うして語る不可候。殊に氏が修辭に富み、警句を挿むに長じたるを見れば、以て演説部の師となすべき也。願くば次に氏をして力の法則によりて唯物論を説明せしめよ、文學的に信號の事を解説せしめよ。以て如何に其の興味の津々たるかを知らむ。汝は終始汝たれどは生の氏に願ふ處に候。

本日龍南の一生あり、書を僕に寄せて、新任獨逸語御雇教師の事を申來り候。曰く、先日よりアラハムと云ふ博士獨逸語教授として雇入相成候。龍南學童の口さがなき、直に油虫先生と綽名いたし候處、教授を受け候ものは、皆その風采の頗る揚れるに、驚を喫し候。ウキヘルム髻、淡紅の色、偉大なる体格、タテ／＼たるビール腹、いかにもカイゼルの國民に候。故ニルドマン博士のメランコリーなりしに似ず、ブライト、エンド、チャフルにて、教授を受くるに何となく心地よく候。加之親切の教へ方、嚙碎かして口に含まする様にて、一週ならずして油

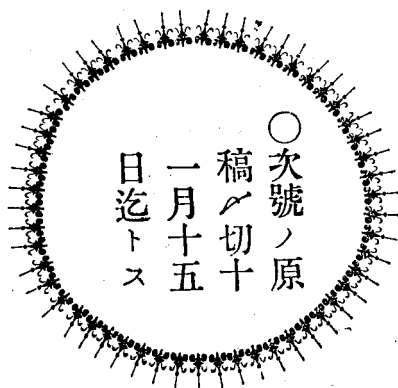
虫の名は取消全然と相成候。と生は實に兄等の幸福を祝上候。

八十一號には大分激烈の論など見受け申候。あれにては、いろ／＼當りさばりもあるべくと存上候。一体雜誌は學校の機關雜誌にて御用的態度を取るべきものに御坐候由、さる人より聞き申候間御參考迄申入候、而し龍南會は實値第五高等學校と全じものなりとて、直ちに龍南會雜誌を以て學校の御用雜誌とするは不可なり、龍南會雜誌は龍南會の機關にて學校の機關にあらずと、云はれば、生は默すべく候。

長崎醫學部と、龍南會の端艇部との競走は、第一回に於て、龍南會の敗となり、第二回には相引きと相成候事は御存じの通りに御座候が、今年はトウ／＼御止めと相成候由、此の風にては龍南の風氣大方は察せられ候。生は委員諸氏の盡力と、會員諸氏の奮勵とを望み申候。運動部が嘗て山高に提ちしは、今は大方夢なるべく、テニスの様な女のする様の事をよろしく候。

へ、マンリーの遊びは、文明人の仕事でなくて、野蠻人のなす處なりとは、會員諸氏の心得なるべく、これにて前便の未段に照應すべく候。卒業生の姓名印刷に、誤植脱落ありてとて、法科生の一人より通知ありし由、小生へ向け御禮狀被下痛み入候。法科にはさる閑人無之候。誤植脱落等元より譽めたる事には無之候得共、何も之れを以て卒業生を侮辱せりなど、云ふ小量の者は法科生には無之、そんな事は俳句でも喰る人のしよ事なさの仕事かと存候。法科生の最も恐るゝ處は岡野氏の商法と、一本氏の國法學にて候、點取の濫い事長谷川先生とて、三舍を避けらるべく、岡野氏の商法の如きは、今迄如何なる才子も六十五点以上を得し事無之候。此等の精細は次便に可申上候。學制改革ありて、大分急がしく相成候由可祝々々、小人閑居は不善の基、オット失敬、何も兄等が小人なりと申す譯にては無之候。而し獨逸の爲めに讀まれぬ様御注意申上候。作文の方針は

改良せられ候得共、その實は前の通りの由、さもあるべき事に候。尚ほショーガクコーレーの如きか。兎角改革と云ぬものは、人の頭腦より改作するを必要と致し候。前の頭腦にて前の如くなるは當然の事にて、怪しむに不足候。瀧の川の紅葉は、たしか想峯氏が青葉の時通信せし由。今その青葉が赤いと思ひ見て被下るれば結構、別に小生の言をなす要無之候。而し二本紅葉、先つ成導寺位のもので候。東都附近の秋光は、今少しく跡形を存し居る武藏野に有之候。檜、山毛櫸、栲などの樺色林今は皆黃金色にて、鷄鳴狗吠皆黃金色を帶べる如き心地いた候。殊に此の中にて時雨を聞き、颯風を見候得者、宛も露西亞にあるが如く、大陸の風光は斯の如きものかと、大畧想像致され候。今若し兄をして此處に入らしめんか、宛もツルゲネーフを讀む様の心地いたすべく、かゝる風物を叙するは露西亞文學の特長に候。繩引きはありや。草かじはありや。願くはこれ



を永續せしめよ。而して願はくば、芋を嚙つて
天下の英雄を罵倒せしめよ草々（在京あゝ、わ）